

Title	カトマンズでの結核対策における保健師活動
Author(s)	植田, 恵美
Citation	目で見るとWHO. 2012, 50, p. 31-31
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/86742">https://doi.org/10.18910/86742</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



## カトマンズでの結核対策における保健師活動

大阪府和泉保健所(青年海外協力隊 OG) 植田 恵美

ネパールの首都カトマンズ市には仕事を求めて農村部から人口流入が激しく、全国の結核患者の約10%が登録されていました。しかし、その患者を支援する医療従事者が少ないため、私の活動地域では近隣住民を、DOTSボランティアとして育成し、DOTSセンタースタッフとボランティアが協力しながら活動していました。そのボランティアの中で、自分が経営する店舗で服薬支援をするボランティアがいました。DOTSセンターの中には開所時間が短いところがあり、患者の利便性を高め毎日服薬支援できる体制を整備するため、早朝や夜遅くまで開いているボランティアの店舗でDOTSが行われていました。適切に対応していたボランティアでしたが、医療従事者でないため、バックアップが必要でした。私はボランティアが記載していた治療カードを見ながら治療状況や喀痰検査の確認をし、患者と会えた時には健康チェックを行いました。店までも、来られない状態の際は家族が薬を取りに来ることになり、患者は孤立するため、訪問して話を聞くようにして不安の軽減に努めました。店舗DOTSの状況は随時DOTSセンターへ報告し、スタッフとボランティアが連携を保てる環境を整えました。

私はボランティアとの活動の他、患者転出率の割合は、ネパール全体では3%に対し、カトマンズ中心部では約10%と高率で、治療終了まで同じDOTSセンターで服薬支援することが困難な場合も多く、患者追跡システムも構築されていないことから、患者に治療開始後早期に継続服薬の重要性を理解してもらうことが必要でした。しかし、結核は治らないと思っている人も依然存在し、診断直後の不安を軽減することも同時に必要でした。同じ結核患者として治療を受け治癒した経験談が有効と考え、過去に治療を受けた女性から話を聞き、私はこの女性をモデルにした予防啓発のポスターを作成しました。登録患者は65%が男性で、ネパールには社会的な性差が残っていたため、啓発資料もこれまでは男性がモデルになったものが多かったのです。患者は「治療当初は治らないだろうととても心配し、友人に言うと私を無視するのではないか」と思い、誰にも言わなかった。でも、スタッフがこの病気はだれにでも罹る病気で、毎日服薬すれ

ば治る病気であると言ってくれたのでDOTSセンターに通い、友人にも自分の病気を説明した。最後まで薬を飲んだことで結核が治り、以前と同じ生活に戻ることができた」と治療経験談を語ってくれました。このポスターを患者が診断直後に読んで治療後の見通しができることで不安が軽減し、疾患を前向きに捉えて服薬を開始できるようにし、文字が読めない人にはスタッフに読んであげるように依頼しました。DOTSセンターへ毎日薬を飲みに来る患者の目につく場所にポスターを掲示し、継続服薬の動機付けを行いました。

ネパールでの活動を通して、世界のスタンダードとされることや日本で学んだ技術や経験そのものを外国人である私一人が伝えても、その国には独自の歴史・文化があり、変化を起こし定着させることは難しいことと実感し、現地の状況に合わせて現地スタッフと一緒に自分の技術を転用し、伝えていくことの重要性を学びました。



DOTSセンターへ来られない高齢患者の自宅を訪問

(注) DOTSとは直接監視下短期化学療法(Directly Observed Treatment, Short-course)の略。WHOが提唱しているDOTS戦略は単に「直接監視下療法」を言うのではなく、5つの要素からなる総合的な結核対策戦略である。(1)結核対策への政府の強力な取り組み(2)有症状受診者に対する喀痰塗抹検査による患者発見(3)少なくとも、全ての確認された喀痰塗抹陽性結核患者に対する、適切な患者管理(直接監視下療法)のもとでの標準化された短期化学療法の導入(4)薬剤安定供給システムの確立(5)整備された患者記録と報告体制に基づいた対策の監督と評価